

思ひ草

第28号

平成31(2019)年1月23日 発行

弱者の視点に立つ教育(「人間開発」)を

人間開発学部教授 元教育系新学部設置室長 ^{しんとみ やすひさ} 新富 康央

教育系学部の設置にあたり、「教育」ではなく、敢えて「人間開発」という言葉を選びました。「教育(education)」には、外へ(edu)引き上げる(cation)という意味合いが強く、それはある意味、上位の子どもたち、即ち「良い子」を核とする「強者の論理」となりがちです。その結果、多くの子どもたちは、その範疇から外れていきます。自己否定的な「閉じた個」「自分への自信の喪失」といった「損在感」状態に陥ります。

教育指導者がしなければならないことは、自分は大切な人間の一人であるという「尊厳感」を持たせることです。今日、その教育技法を真摯に追究する指導者が求められているのです。

教師など教育指導者が持ちたい、子どもたちに対する信頼は何でしょうか。それは、どの子どもも本来、「愛されたい」「信じられたい」「伸びたい」などという自己向上や自己実現への期待と意欲に溢れている、という信頼でしょう。

私たちは、子どもが本来的に持っている、こうした本性を上

手に引き出し、活用し、肩をポンと押すように後押しさえすれば良いのです。無理に引っ張り上げようとしなくても、それで子どもの心は開き、それに伴い、子どもの能力も開花し、子どもを持つ「資質・能力」は、「開発」されていくのです。

人間の資質・能力は、計り知れないほど、深遠で、広いのです。能力の有無を問う時、それは結果として表面に出ている能力や才能を指していることが多いようです。しかし、それは、一人一人の子どもたちの資質・能力の全体ではありません。

これからの教育指導者は、単に今ある才能の有無だけを問うのではなく、個々の子どもに潜在している能力をゆっくり引き出し、広げ、深めることができないからなのです。

しかし、「教育」することよりも、「開発」することのほうが、実際は困難です。この学部は、その方法を科学的に追究する「がんばることを応援する」科学の構築を目指しているのです。

教師の「嫌われる勇気」

人間開発学部教授 ^{うえはら きちお} 植原 吉朗

「植原先生は話が長い」と、学生から揶揄されることがある。自分でも長いと思う。いつも、言っておきたいこと、伝えたいこと、理解してほしいことが山ほどあるのだ。それを手短かに、簡潔に表現できていないとすれば、それは私自身の未熟というほかない。いかに的確に、学生にインパクトある話ができるかを常に考えるのだが、それ自体が話を長くしている原因なのかもしれない。聞かされる学生は、さぞ嫌がっているだろう。

話していてふと、自分が言っていることはどこかで聞いたことがある話であったことに気付く。そうだ、これは私が学生時代に剣道の恩師から道場で聞かされた話ではなかったか。そういえば恩師の話も長かった。当時どんな話だったかを理解するよりも、少しでも長く、長くと念じていた。その分、苦しい稽古時間が短くなるのを期待していたのだ。そんな心持ちで聞いた話など覚えているはずもないと思いきや、今自分の口を衝いて出る言葉がその時間聞いていた話であることに、今さらながら驚く。良い講話は、自ずと心に留まるものなのだと思ふ。

話は変わるが、中学時代、生徒の誰からも嫌われている幾何

の教師がいた。何よりも、生徒を褒めたことがなかった。また三角形の合同を証明する問題で「合同の定理により」などと説明を端折ると「バカモン、やり直し!」と叱責が飛んだ。言葉で的確に説明することには特にうろさかった。「二辺とその挟む角がそれぞれ等しいから」「一辺とその両端の角がそれぞれ等しいから」…「その」とか「それぞれ」を書き忘れただけで、全問0点にされた。答えは合っているのに、と生徒たちは怨み骨髄、私もその一人だった。

卒業式の日、生徒たちが恩師を囲む一方でその幾何の先生が一人ずっと会場を後にするのを目撃した。特に寂しげでもなく、自然な面持ちであったのが思い出される。

それから数十年経ち、私はこの先生に感謝の思いがある。あの時の厳しい指導があったからこそ、今こうして文章が書ける自分がある。今にして、卒業式会場から人知れず去っていった先生が格好良く思われてならない。私自身も、いずれ斯くありたいものと思う。

さて私も、勇気をもって長い話をするとしようか。学生は、いい迷惑だろうが。

教育実習

教育実習での失敗は、これからの糧となる

初等教育学科准教授 寺本 貴啓

教育実習に行く前、可能な限り準備をしていたとしても、実際には想定していなかった問題に直面します。授業場面で見られる例を挙げると、①学級全体の授業であるにも関わらず、一部の児童と先生だけのやりとりになってしまっている事例、②実習生の話が長いために児童が話す機会が少なく、児童主体の授業でない事例、③一見、授業は指導案通り進んでいるが、児童が考える機会がほとんどなく、何を学んだかわからない事例、などがあります。また、日常場面で見られる例を挙げると、①一部の人懐っこい児童しか見えず、日頃からおとなしい児童などクラスの児童全体に目を配られていない事例、②Aくんの悩みのために相手になり配慮をしていたが、別の児童から見るとAくんを特別扱いしていると見られてしまう事例、③学級ルールやこれまでの背景を理解していないにも関わらず、実習生が独断で判断したり、指導教員に相談しなかったりして間違った指導や指示をしている事例など、様々あります。このような問題はほんの一部ですが、実習生は失敗をして「何が悪かったのか」「どうすればよかったのか」に初めて気づくことができるのです。

教師の仕事は、多くの人を相手にしている職業です。そのため、決まった仕事を毎回同じようにしても前と同じようにうまくいくとは限りません。どんどん仕事をこなすベテランの先生も、実習生の頃はうまくいかず、悩むことも多かったはずですが。教師という仕事は、専門的な知識を理解することも多くありますが、経験から学んでいくことも多く、これまでの経験を基に常に考え、うまくいかない場合は、その時点で学び、次の時に活かしていくこととなります。

これからはAI時代と言われていますが、人は機械だけで育てることはできません。教師は人によって行われる、将来に文化や技術などを繋げていくとても大切な職業といえます。失敗を繰り返し、これからの糧として成長し続けてもらいたい。

教育実習を終えて

初等教育学科 3年 遠藤 真由

私は、6月に母校である川越市立大塚小学校で2年生のクラスに入り教育実習を行った。ここでは教育実習を終えて感じたことを2つ述べる。

1つは「子どもは教師のことをよく見ている」ことだ。私は計11回授業をしたのだが、正直うまくいったといえる授業はなく、心にネガティブな思いが残り、このまま教師を目指していくべきなのか悩んだ。そんな中実習を終える際にクラスのみんからもらった手紙を読んだ。そこには児童からの感謝や喜びの気持ちがたくさん書かれていた。私は実習中なるべく多くの児童と関わることを、またその児童の声に耳を傾け、真摯に受け止めることを意識して取り組んだ。休み時間は校庭で鬼ごっこをしたり、図書室に行ったり、また普段関わりの少ない児童には給食の時間や下校指導の時に進んで関わりに行った。児童はそういうところをよく見て、認めてくれていて、未熟な私にも児童に影響を与えられるのだと感じることができた。改めて教師は児童によって生かされていることを実感した。

2つ目は「児童が興味関心を持ち、思考できる授業を作ることがいかに難しいか」ということだ。大学でアクティブ・ラーニングや興味の持てる導入の工夫など学んできたつもりだったが、児童という対象がいると大学のようにはいかなかった。音楽の授業で拍を刻む活動をする際に、児童が教科書に書いてあるカスタネットを使いたそうにしていると気づいていたにも関わらず、私は指導案通り手拍子でやらせてしまったため、その時間児童をつまらなそうな表情にさせてしまった。日頃から児童理解を図り、さまざまな状況を想定して授業準備すること、またそれを柔軟に変化させ、対応することが重要だと強く感じた。

教育実習を経て改めて教職の素晴らしさ、またその難しさを感じた。残りの大学生活で様々な経験を積み、教師として教壇に立った時に多くのことを児童に伝えられるよう努力していきたい。



教育ボランティア

教育実践総合センターでは、地域教育支援の業務も担当しています。大学近隣をはじめ、地域の保育所、幼稚園、小中学校等の様々な活動に学生がボランティアとして参加し活動しています。

宿泊体験学習の指導員

初等教育学科 2年 秋山 航海

私は今年度、川崎市の小学校の自然教室に指導員として2度参加しました。そして、教育インターンシップとはまた異なった貴重な経験を得ることができました。

その中で最も印象に残った部分は、児童の就寝後に行われる職員会議です。先生方がどうすれば児童全員に最適な環境となるかを真剣に議論している場に参加させて頂き、時に発言もさせて頂いたことは他では得難い財産となったように感じ、教師になりたいという思いを一層強くすることができました。

保育補助

子ども支援学科 2年 浅野 周平

私は千代田区立ふじみこども園で保育ボランティアをさせていただきました。保育ボランティアの活動は、16時から18時までの預かり保育の時間に子どもたちと遊ぶことでした。子どもたちとかかわる中で、日々の生活の事、クラスのルール、遊びの事や幼児一人ひとりの理解など保育者として磨くべき素質だけでなく、保育者という職業の魅力について再認識することができました。このような貴重な経験をさせていただいたことを活かしてより良く学ぶことができるように励んでいきたいと思えます。

外国籍児童の学習支援

初等教育学科 4年 鈴木 美柚

私は外国籍児童が夏休みの宿題を学校で行う夏季勉強会のボランティアに参加した。そこでは、外国籍児童の学習に対する意欲に感激した。明るい表情で取り組み「できたよ!」と満面の笑みで宿題を見せる子どもたちの姿が印象的であった。また外国籍児童は一人一人に伝わる言葉が異なるため、様々なコミュニケーションのとり方を学ぶ機会となった。相手に伝わる言葉を考えたり、ノートに文字を書いて伝えたりすることで、子どもに合わせた指導を行った。子どもたちのできた時の喜んでる顔や「ありがとう」という言葉に、指導することのやりがいを感じる事ができた。

夕涼み会の運営支援

健康体育学科 4年 末永 和

今回初めて新石川小学校の夕涼みの会にボランティアとして参加しました。私は会場の設営、ストラックアウトブース等を担当しました。子どもたちが楽しんでいる様子や笑顔を間近で感じることができ、気づくと私も童心に戻って、子どもたちと一緒に遊びに夢中になっていました。私が生まれ育った長崎県では、地域の方々と交流できる機会がたくさんあり、お年寄りから幼い子どもまでとても仲が良いです。故郷と重なる部分に人の温かさを感じ、心が癒されました。

なしかちゃん広場

子ども支援学科 4年 栗山 亮子

國學院大學が青葉区の一員であることをとても感じた活動でした。なしかちゃん広場は、青葉区にある様々な保育園の先生方が協力し、地域の子育て家庭との時間を楽しむ広場です。私はおもちゃ広場の担当になり、どのように子どもと保護者の遊びを援助しようか迷いましたが、先輩保育士の方が支えてくださり、環境構成や安全への配慮を学ぶことができました。保育を学ぶ私たちにとって、先輩保育士や子育て家庭とかかわる時間が持てたことは、今後就職に向けて大きな経験になりました。

YOKE(ヨーク)

初等教育学科 3年 飛田 恵

昨年度、国際機関実務体験プログラムで多文化共生を目指して活動するYOKEで100時間のインターンシップを経験しました。高校生以上が対象の地球市民講座・小学生の国際機関見学といったイベントの補助、外国につながる子どもの学習支援の場の見学等を通してグローバル人材とは何かについて深く考えることができました。

現在はプログラム修了者で作るOVER100というグループに入り、同じ国際機関であるIUCで開かれるイベントにファシリテーターとして参加し、さらに経験を深めています。

教育インターンシップ連絡協議会・報告会 教育実習に向けて！

12月25日(火)14時から、教育インターンシップ連絡協議会・報告会を開催しました。全体会では、30年度教育インターンシップの全体的な実施状況の報告に引き続き、学生の実習報告と学校や幼稚園・保育園の先生方からの実施状況報告がありました。幼稚園実習について子ども支援学科2年の澁谷美樹さん、保育実習について子ども支援学科2年の小山紗季さん、小学校実習について初等教育学科2年の北川周さんと佐々木汐里さん、中学校実習について健康体育学科2年の寺島大貴さんと小山田颯月さんが、教育インターンシップの経験をもとに報告をしました。



各園や学校の実施状況について、横浜市立中村小学校校長の金子郁規先生、横浜市立青葉台中学校副校長の本江伊智郎先生、菊名愛児園園長の伊藤愛先生からお話をいただきました。今回の連絡協議会・報告会では、学生を受け入れてくださっている園や学校から21名の先生方にご参加いただきました。特に分科会のグループ討議では、先生方に加わっていただき、「教育インターンシップの経験を教育実習にどう生かすか」のテーマのもと、教師として大切にすべきことについて、「実践を学びにつなげること」「失敗を恐れず一人一人の子供と向き合うこと、子供の心に響くように伝えることが大切」等、ご指導がありました。「子供たちを叱ることが難しい」という学生の声に対しては、「怒る、叱る、諭す、とうように、言葉は様々だが、子供の状態に合わせて指導することが大切」と具体的なアドバイスをいただき、「子供の命や人権にかかわることを見逃さない」の先生の言葉が学生たちの心に響きました。インターンシップ報告会での学びを今後につなぐことが新たな目標となりました。



未来塾

開講講座は「5講座」、延べ受講者数は「424名」でした

今年度の「未来(みらい)塾」の実施状況は以下の通りです。

担当・講座名	開講回数・受講者数 (2018年12月20日現在)
石川清明 先生・夏秋英房 先生・野本茂夫 先生の 講座 子ども学研究会	19回開講、延べ受講者数110名 12月21日、1月11日、1月18日開講予定
高山真琴 先生の「ピアノ講座」 講座1 ピアノ講座	43回開講、延べ受講者数97名 1月～火曜日2限、3限 開講予定
講座2 東京都特別区幼稚園教諭採用試験対策ピアノ講座	57回開講、延べ受講者数215名
原 英喜 先生の 講座1 臨海学校見学と海体験 講座2 雪の環境とスキーを体験理解する	千葉県館山市 8月に1泊2日 受講者数2名 長野県志賀高原一の瀬 3月に2泊3日予定